教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

人類と神との和解

一九八三年キリストの聖体祭日　前日の説教

贖いの神秘が特に私たちの祈りと黙想の対象になっている聖年にあたり、ご聖体の祭日は特別な意味を帯びています。事実、贖いはご聖体のうちに、現実のできごととして再現されるのです。キリストの犠牲は教会の犠牲となり、こんにち、人々に和解と救いの実りを与えてくれるというわけです。

キリストのみ名とペルソナにおいて、司祭が、「これは、あなたがたのために渡される私の体である」と宣言する時、単にキリストの御体がそこにいますことを述べているだけではありません。それどころか、キリストがすべての人を救うためにご自分の生命をささげてくださったこと、つまり、犠牲を表わしているのです。キリストがご聖体を制定されたのは、実にこのためでありました。空腹の人びとのために用意した生命のパンが、特に優れたものであることを人々にわからせる目的で、パンを増やした後、カファルナウムの説教の中でおおせになっています。「私の与えるパンは世の生命のためにわたされる私の肉である。」(ヨハネ6・51)　ご聖体を贈るために、イエズスはご自分の御体をいけにえとなさったのです。そして、そのいけにえのおかげで、体は生命を伝えることができるようになりました。

ぶどう酒を聖変化させる時の言葉は、もっとはっきりしています。「これは私の血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血である。」飲み物として与えられた御血は、新しい契約を結ぶために、カルワリオで流された御血です。最初の契約は罪によって破られましたが、二度と破られることのない新しい契約を、キリストは結んでくださいました。その契約は、キリストご自身において完成されたからです。キリストご自身において、人類は神と最終的に和解することができたのです。

ユーカリスチアはキリストの犠牲

このように、パンとぶどう酒の聖変化のときに、贖いのいけにえが実現します。キリストは、かつて十字架上でささげた犠牲を、神秘的な方法で、司祭を通して、ふたたびささげてくださるのです。ご聖体は、カルワリオの丘で一度だけ供えられた犠牲の単なる記念に留まりません。十字架上のあの犠牲は、各共同体で司祭がささげる犠牲によって、秘跡として更新され、現存するのです。たしかに、カルワリオの犠牲だけで救いに必要な恩寵はすべて確保されました。ご聖体の秘跡は、その実りを得、貯えておくことに外なりません。キリストは、信者の共同体をその犠牲にあずからせるため、ご自分の犠牲がたえず現存するようお望みになったのです。ご聖体の秘跡を祝う毎に、教会は主の犠牲にあずかります。信者はみずからのパーソナルなささげものを主の犠牲と一つにしてささげるよう招かれています。ご聖体はキリストご自身の犠牲であると同時に教会の犠牲でもあるわけですが、そうなるのは、主が教会をご自分の犠牲に一致させ、ご自分の奉献にあずからせてくださるからなのです。

ですから、ご聖体にあずかる信者は、自分自身を奉献しなければなりません。神のみことばに耳を傾け、共に祈るだけでは不十分です。苦しみや困難、試練、とりわけ自分自身を奉献することによって、キリストの奉献をみずからの奉献にしなければなりません。そのために、信者は、キリストと共に、キリストにおいて、すべてをささげ、キリストご自身の奉献と一つになって、おのおのささげものが御父のみ前に届くよう努力しなければならないのです。

主の犠牲のささげものにあずかれば、世の悪を打ち破ったキリストの勝利にもあずかることができます。世界中にはびこった悪を目にして心が揺らいでも、解き放たれているかのごとき罪の力もキリストの救いに抑えられていることを忘れてはなりません。ごミサ中、聖変化の言葉が唱えられ、主の御体と御血が犠牲の行為として現存するごとに、憎悪にまさる愛、罪に打ちかつ聖性も現存するのです。聖体の祭儀は、いずれをとっても、この世の全ての悪に勝る力をもっています。ごミサの犠牲はことごとく、贖いの具体的な実現、よりよい世界をめざす信仰深い人類と神との和解、をあらわしているのです。

教会を建設する

贖いのみわざを人類全体に適用するなら、ご聖体の犠牲は教会の建設に貢献することになります。カルワリオの丘でキリストは、ひとりひとりのためだけでなく、共同体全体の救いをかち得てくださいました。つまり、主の犠牲によって得た恩寵のおかげで、人類は教会において一つに結ばれたのです。ご聖体は、日々聖なる共同体を築くことで、このような目標を具体的に実現してゆきます。祭壇上でささげられる犠牲の効果は、教会の聖性を強め、教会が世界に広まるのを助けることであります。こういう意味で、ご聖体の祭儀はつねに宣教であると言えるでしょう。ご聖体のおかげで、目には見えないけれど、教会があらゆる環境のなかに浸透してゆくのを助ける、すこぶる強い力を得ることができるからです。

教会を建てるということは、一致を強めることでもあります。最後の晩さんの時にキリストが弟子たちの一致を祈ったのは偶然ではありませんでした。とすれば、ご聖体を祝うごとに教会は、主の模範にならって、一致がより一層堅く、より一層完全になるよう、祈っていることになるのです。

このように、ご聖体は、キリスト者すべてが例外なく、互いに一致するのを助けます。またカトリック教会内においては、信者が相互の相違を認めつつ、お互いの一致の絆を固めるのに役立ちます。このような一致を推し進める力に協力するならば、キリスト者はすべて、全世界に向かって証明することができるはずです、人類の一致のために主が忍ばれた苦しみは無駄にはならなかったと。(六・一)

「ほんとうに主はよみがえられた。」(ルカ24・34)　使徒たちのこの言葉ほど、私たちの救いにとって喜ばしくも重要な知らせはありません。イエズスのうちに続いた生と死との恐ろしい戦いは、生命の勝利に終わりました。キリストは生きておられる。キリストは悪の軍勢の征服者であり、歴史の主である。(コリント②13・4とレビ5・5、1・8とフィリッピ2・11参照)　キリストは、かつてのラザロのように、死去する前の状態、つまりいずれ死すべき生命を取り戻されたのではなく、新しい永遠の生命に入られたのです。「死者からよみがえられたキリストはもう死ぬことがないと私たちは知っている。キリストに対してもはや死は何の力ももっていない。」(ローマ6・9)

イエズスは「初穂」であり、「死者の中から最初に生まれたお方」(コリント①15・20とコロサイ1・18)ですから、全ての信者をご自分の方に引き寄せてくださいます。なかでも特に聖母をお引き寄せになります。復活されたお方に続いて栄光を受けた御母が救いの計画の中で果たす使命を考えれば、それは当然なことです。教会もこの点には昔から気づいていました。

そこで私たちも、前の世代のキリスト信者たちに心を合わせ、この嬉しい知らせをよろこんで宣言します。マリアは主と共に生きておられる。命に満ちて、もはや滅びることはないです。

復活されたお方にならって栄光を受け、今も生きる聖マリアを大きな喜びのうちにながめます。聖母をみれば、教会の行き先を見ることができます。キリストに忠実を保つなら、私たちもマリアと同じ喜びを得て、目前に開かれる生命の扉を目のあたりにすることができるでしょう。私たちの確信がマリアの前例によって強められますように。聖母の祈りが私たちの歩みと希望の支えとなりますように。(…)

本日の典礼は善き牧者について考えよとすすめていますが、それは大勢の聖なる召命が教会に必要なことをよく考えよという呼びかけなのです。私は何にもましてまず主に感謝してくださいと勧めます。世界中のかなり多くの司教区で、昨年来、召命を受ける人が増えているからです。これは大きな慰めです。

召命は神のたまものですが、あり余るほどの主の収穫のために、充分な数の働き手をお与え下さるよう、一所懸命に祈らなければなりません。

特別聖年にあたり私たちは、とくに熱心に、贖いの神秘を生活の中に示す努力をしているわけですが、主の呼びかけに喜んで応える勇気のある人が大勢でてくるようにと、この教区や家庭でも、特別の祈りをささげてくださるようお願いします。

私はとくに家庭をもつ人々にお願いしたいと思います。家族には召命の種の成長を育むというたいへん重要な役割りがあるからです。子供たちの召命を尊び、高く評価し、司祭職や修道生活に身を捧げて主のおそばを歩むよう子供たちが召されたときには、誉れを感じることができるようになって欲しいのです。

(一九八三・四・二十四)

キリスト者の召命

主の収獲のために、充分な数の働き手が必要

いい。キリストの恩寵のおかげで、もはや死は聖母に対して無力であると。

このような確信があればこそ、遅くとも三世紀の昔から「天主の聖母のご保護によりすがりたてまつる」(スヴ・トゥウム・プレジディウム)と、神の力と清さと憐れみに満ちた御方マリアに、人々は祈りをささげてきたのです。

キリスト者の生き方

感覚ではなく信仰によって把握するほかにはない

教会の教えによれば、私たちの名においてご自身を御父にささげ、また聖体拝領において私たちと一つになってくださるキリストは、ご聖体のうちに、真に、現実に、実体的に現存なさいます。トレント公会議は、最後の晩さんと生命のパンに関するイエズスのことばを思い起こし、教会の権威ある解釈を加えました。「聖別の直後にわれわれの主の体と血とが、霊魂と神性をともに備えて、パンとぶどう酒の形色の中に現存することを神の教会は絶えず信じてきた。言葉の力によってパンの形色の中に体が、ぶどう酒の形色の中に血が現存するが、自然の結合と共存とによって、ぶどう酒の形色のうちにも体、パンの形色の中にも血、また両者の中には霊魂が『死者からよみがえって、もう死ぬことがない』(ローマ6・9)主キリストの体の各部分と位格的結合によって一つになった神性とともに、現存している。そのため、全キリストが両形色の中に、そしてまた一つ一つの形色の中に実際に含まれている。全キリストがパンの形色の中に、パンの形色のどの部分にも含まれ、全キリストがぶどう酒の中に、ぶどう酒の形色のどの部分にも含まれているのである。」

さらに、使徒たち、ヘブライ人への書簡の著者、初代教会の主張を解釈して、トレント公会議の教父たちは次のように述べています。ご聖体は時間のうちにおけるキリストの「犠牲の現存」である、つまり、ご聖体は十字架の犠牲の更新であると。

第二バチカン公会議も同じ真理を確認して次のように教えています。「『我々のすぎこしであるキリストがいけにえになった』十字架上の犠牲が祭壇上で行なわれる毎に、我々の贖いのわざが行なわれる。」(『教会憲章』3)

読み、黙想すべき文書

みなさん方の霊性とカテケージスは、教義上の真理という栄養を吸収していなければなりません。ご聖体に関する、教会の主な文書、回勅、資格のある本ものの教師、聖人や神秘家の体験などをよく読み、黙想してください。ご聖体については、混乱したり、迷ったりする余地はないほどはっきりしています。

ご聖体は「感覚ではなく、信仰で把握するほかはない。ところで、信仰は神の権威にもとづく。」(『神学大全』3 q.75,1)　聖トマス・アクィナスはこう書いています。ここでミランの偉大な司教、聖アンブロジウスの教えに耳を傾けてみましょう。「さて、あなた

ご聖体―愛の刻印

イエズスの模範にならうよう招かれている

が、キリストの体を受けることを心から認めながら、『アーメン』と言うのは、理由のないことではない。あなたが聖体を求めるとき、司祭はあなたに、『キリストの体』と言う。それにあなたは、『アーメン』すなわち『そのとおりです』と答える。舌が宣言するものを、心が確信するように。以前から前表されていたのは、この秘跡であるということを悟りなさい。」(『秘跡』第4講話の5・25)

私たちは被造物として、宇宙全体と私たち一人ひとりの創造主であり主であらせられる神に祈り、かつ神を礼拝すべきことは、キリスト信者であれば、深く確信しています。しかし同時に、信仰に照らされているならば、完全に有効で、神の無限の聖性と知恵にふさわしい礼拝、つまり、真の礼拝をささげるには、御ミサの犠牲以外に方法はないことも知っているはずです。人間は礼拝せずに生きることはできない。従って御ミサがなければ生きられない、ということになるのです。

信者はイエズスが食べ物と飲み物の外観のもとに現存なさることを知っています。イエズスは余すところなくご自身を与えて私たちと一つになり、苦しむ私たちを慰め、私たちをキリストに変え、全ての人々への愛を燃えたたせたいとお望みだからです。しっかりした教理の知識を身につけ吸収しなければ、キリスト者としての生き方の意義や、修道者としての召しだしの力を知り、社会の刷新を目指して挺身し、キリストと真理と愛における一致の意義を正確に理解することはできないでしょう。先ほど引用した聖アンブロジウスは別の所で次のように書いています。「毎日利益をもたらすものを、毎日受けなさい。毎日それを受けるに値するように生活しなさい。(…)傷をおっている者は、薬を求める。罪のもとにあるわれわれは、傷をおっている。薬は、天上のうやまうべきサクラメントゥム(秘跡)である。」(『秘跡』第5講話の4・25)

ご聖体は愛のおかげである

みなさんは今しがた、出エジプト記の一節、「過ぎ越し」、つまり、イスラエルの子らを救い出す場面に耳をかたむけたところです。この出来事を記念して私たちは復活祭を祝うのです。過ぎ越しはまた、自由を祝う祭でもありました。小羊をささげてそれを食べ、あらためて主との交わりと兄弟たちとの交わりを思い起こし、さらに、主の「過ぎ越し」を思い出したのです。主は、ファラオの支配下にあるエジプトで奴隷の身分であったみ民を救い出し、約束の地へと導かれたのでした。

さて、このミサ中に読んだ聖ヨハネの福音書は、同じ過ぎ越しを祝おうとするところです。しかしここで言う「過ぎ越し」は、イエズスご自身の過ぎ越しを意味しています。イエズスが「この世から父のもとに移る時が来た」(ヨハネ13・1)のです。イエズスにとっても、弟子たちや私たちにとっても、この過ぎ越しはエジプトを出国することではありません。現世の地理の上での出国ではないのです。この過ぎ越しは福音史家聖ルカがご変容の場面で見事に描いているように(9・31参照)、イエズスの出立、主が御父のみもとへと去られることで、エルサレムでのご受難、ご死去、ご復活の「時」に実現しました。

この出国、つまりイエズスの出立は、愛の刻印をもっていました。「イエズスは、この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された」(ヨハネ13・1)のです。この愛に動かされてイエズスは十字架上で死去なさいました。「イエズスは、私を愛し、私のためにご自身をわたされた」(ガラツィア2・20)のです。また、この愛があったればこそ、イエズスは私たちにご聖体をのこしてくださったのです。

霊的な糧

カトリック要理を通してよくご存知のように、ご聖体は、私たちを罪と死とから救い出すために御みずからをただ一度だけお捧げになった主の御体と御血との秘跡です。(ヘブライ9・26～28参照)　イエズスはこの秘跡を教会に託されたので、教会はパンとぶどう酒の外観の下にご聖体を教会自身の捧げ物となし、この祭壇のまわりに集う私たち信者に、霊的な糧として永遠に与えつづけることとなりました。

ですから、ご聖体はこの上なくすばらしい犠牲です。何しろ十字架につけられたキリストを、生ける人、死せる人、すべてのキリスト信者のために、大勢の司教と司祭が絶え間なく捧げる犠牲であるからです。

ご聖体は、同時に、霊的な糧であります。霊的な糧の形で、神であり人であるイエズス・キリストご自身全体を頂きます。神人キリストは、御みずからの実体で私たちを養い、私たちのひとりひとりがみな主に似たものとなるようにしてくださるのです。事実、ご聖体のおかげで、教会、つまり、キリストの神秘体は一つになります。「パンは一つであるから、私たちは多数であっても一体である。みなひとつのパンにあずかるからである。」(コリント①10・17)

私たちはパンとぶどう酒の外観の下に現存なさっているキリストを認め、そして礼拝します。一日中いつでも、キリスト信者が主に祈りをささげ、この聖なる秘跡のうちに在す主を黙想できるように、また、病に伏す人や臨終の床にある人々が聖体拝領できるように聖櫃に安置されたキリストを認め、礼拝するのです。聖体大会とか、ご聖体の祭日などに主の現存を祝うとき、私たちは公の礼拝をしています。聖体祭儀などによって主が私たちの間に現存しておられることは、キリスト者にとって、イザヤ預言者がメシアを称したことば、エンマヌエル、つまり「神は我々と共にまします」ということのしるしであります。(イザヤ7とマテオ1・23)

福音史家聖ヨハネはこのご聖体の約束を伝え(ヨハネ6・51～59参照)、弟子たちにも私たち自身にとっても、これが信仰のために大切なことであると教えてくれましたが(同上60～71)同時に、最後の晩餐のときにイエズスが弟子たちの足をお洗いになられたことをも記しています。(ヨハネ13・1～16参照)

ご聖体制定については、他の福音史家たちや聖パウロ(コリント①11・17～34参照)さえも語っているのに、なぜヨハネだけは、その代わりに洗足の場面を記したいと思ったのでしょうか。ヨハネはみずから、それを解く鍵を与えてくれています。すでにお聞きになったように、洗足の場面をとりまく背景を「限りなく愛を示された」(ヨハネ13・1)イエズスの崇高な愛と、ご自分の模範に従えとの主のすすめ、つまり、「私は主または先生であるのに、あなたたちの足を洗ったのであるから、あなたたちも互いに足を洗い合わねばならぬ」(ヨハネ13・14)というお言葉に関係づけているからです。(…)

ご聖体に与る人は、みずからが受けたイエズスの模範にならうよう招かれています。つまり、主の愛にならい、隣人の足を洗うほどまでへりくだって仕えるようにと招かれているのです。

(一九八三・三・九)

不変の教え

ご聖体の犠牲

十字架上で御血を流されたキリストの御体

ご聖体は、人間が受けた最大かつこの上なく真実な愛の記念であり表われですが、そのご聖体は、何よりも現代世界を刷新するための力であります。

罪の意識をゆがめ、あるいは失ってしまった現代世界は、実際いろいろな徴候からわかるように、さまざまな段階で、憎しみという悪と、それに伴う対立、分裂、暴力に冒されてきました。ところで、憎しみに打ち勝つことができるのは愛の力だけです。憎しみは古くなるが、愛はいつも新しいのです。(…)

今日の世界が必要とするのは、イエズスと、イエズスの愛のメッセージと、救いと一致の源であるご聖体です。キリストのとりなしによらなければ、憎しみ、不正義、暴力、罪などから成る環を破ることはできません。キリストは、私たちが求める富、糧、平和、真理、自由です。キリストの助けがあれば、またキリストの愛の力によらなければ人の心は変わりません。キリストによらなければ、「目には目を、歯には歯を」という復讐心ではなく、人々を共通の御父の子であると考え、敵を愛し、何度も、いつも人を赦せという教えに従う新しい人は生まれないのです。渇きを潤す水は、キリストのお言葉よりわき出てきます。

私たちがキリスト者とは何者であるかを再発見できるのはご聖体のおかげです。神は愛であります。神が先に愛してくださったのですから、私たちは神をお愛ししなければなりません。愛はイエズスの教えの中でも最も大切なものです。ところで、神への愛は、隣人愛に表わさなければなりません。「愛するものは神を知る」、また、「目で見ている兄弟を愛さない者には、見えない神を愛することができない」からです。(ヨハネ①4・7、20)

このように、隣人を愛することは神を知るための第一歩であるだけでなく、キリストの聖心のはかりに基をおいた愛の黄金律なのです。「私が愛したようにあなたたちが互いに愛し合うこと、これが私の掟である。」(ヨハネ15・12)「私が愛したように」、これが(愛の)尺度でなければなりません。

イエズスは極みまで、つまり御自らの命を与えるという愛の極みまで、言いかえれば、限りなく、私たちを愛してくださいました。

人間の救いには、キリストが犠牲のうちに、ご自身を御父にお捧げになることが必要だったのです。憎悪と敵意は、十字架上で御血を流したキリストの御体によって、滅ぼされ、追い払われました。霊と水だけでなく御血もまたこれを証明しています。実に、イエズスは感謝(ご聖体)の犠牲なのです。(…)

それゆえ、信仰の秘義であるご聖体を祝うとき、私たちは主の死を宣言します。洗礼と苦しみと死と復活、そして、イエズスと人類の秘義です。このように、全体を見れば、肉の体は栄光に輝く御体となり、信者同志、そして、信者と御体の一致を実現させることがわかります。こうして、たえまなく成長を続ける生きた組織体である教会が建てられていくのです。

キリストの共同体をなす人々が神秘的に、キリストの御体、つまり教会と一致し、また、共同体のメンバー同志が一致するのは、ご聖体のおかげです。

というわけで、すべての秘跡と、教会の聖務者の仕事、使徒職は、いずれも、いとも聖なるご聖体に強く結びつき、ご聖体に向かっています。ご聖体は真にキリスト教世界の心

堅信によって先に印を受けた信者は、ご聖体によって単なる食事に加わるのではなく、聖アウグスチヌスの言う「秘義」を受け、キリストの御体の完全な一部になります。これがキリスト者の本質ですが、実はこの本質は、私たちにではなく、神のうちにあるのです。

愛の記念、愛徳のきずなである聖体の秘跡は、同時に一致と交わりを生み出すしるしでもあります。

主の死が宣言されると同時に、復活が予示されます。ご聖体は栄光を受けた御体でもあるからです。キリストの御体とは、この世で生き、死し、そしてのち光栄を得た真実の人格を備えた御体です。ご聖体のうちに過ぎ越しの秘義が再び新たにされるのです。それは、であり、中心なのです。教会のこの上ない霊的な富、キリストご自身、生きたパンがそこにあります。キリストは御みずからの御体をとおして聖霊によって人々に生命を与え、生きたものとしてくださるのです。(『プレスビテロルム・オルディニス』5参照)

聖なるご聖体を祝うことが基盤でも中心でもないようなキリスト共同体を形成することは不可能です。なぜなら、ここにおいてこそ、共同体の精神におけるすべての教育が始まらなければならないからです。(同上6参照)

ご聖体は全ての中心になる

聖書や公会議のもとに明らかにされた教えによると、司祭や修道士や神学生自身の霊的な面と司牧者としての使命の両面における生活の中心、根源となるもの、それがご聖体の秘義です。

神の愛によって多くの人の中から選ばれた者(司祭)は、自分の使命に忠実を保ち、大勢の共同体の人々のもとへ自分が一層霊的にゆたかになってもどりたいと望むなら、自分自身のゆたかさをご聖体の秘義という源のうちに見出さなければなりません。

ご聖体をすべての中心におくということは、自分の考えや展望の中心を、私たち自身のプログラムではなく、私たちの生活の中心である神のプログラムの中に位置づけるということです。そうしなければ、私たちは空しく響くシンバル、枯れ技になってしまうでしょう。

兄弟のみなさん、私たちがキリストの御体に変わるように、公会議は疲れを知らずに勧めています。キリストにのみ従え、キリストの至高なる知識を吸収せよ、日々のキリストとの会話を続けよ、典礼でのご聖体拝領に力を入れよ、と。(『プレスビテロルム・オルディニス』18と『オプタータム・トツィウス』11参照)

これは、確信をもって聖性への道を歩めという招きです。キリストを宣言しキリストの証しをするという私たちの使命を遂行できる唯一の道であるからです。こうすれば、光と慰めを人々に与えることができるわけですが、人々の救いは神の啓示によって知らされた真理の中にのみ見出すことができます。(…)

聖母は聖霊によって救い主を宿され、教会の母として、キリストの神秘体の建設と発展をなし遂げてくださいました。その聖母に願います。私たちの兄弟になってくださった御子の一生の秘義を、すべての司祭と神学生が深く学ぶことができるよう助けてくださいますように。ご聖体こそ、教会と世界の近い将来に対する信仰と希望の根拠なのです。

(一九八三・五・二十一)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393